

市民科学通信

2022年6月号

(通算25号)

2022年6月27日 発行

発行: **NGO 市民科学**
京都研究所

〒616-8012 京都市右京区谷口
垣ノ内町5-8
嵐電・龍安寺駅北東へ徒歩3分
事務局 E-mail :
sigemo.nao@gmail.com

【コラム】「ありのままの自然」に想う

——朝永振一郎の問題提起—— 重本冬水 . . . 2

【展覧会紹介】モディリアーニ展 照井日出喜 . . . 5

ゼミ卒業生に贈る言葉 塩小路橋宅三 . . . 8

ジェームズ・ブラッドワース著『アマゾンの倉庫で絶望し、
ウーバーの車で発狂した』（濱野大道訳、光文社、
2019年）を読む——Tさんへ—— 篠原三郎 . . . 10

「社会的労働」と社会主義（上）—柄谷行人練習帳⑮— 香椎五郎 . . . 12
個性とは何か（1）

—主我と客私の循環をわがものにする— 竹内真澄 . . . 17

探究ノート（Ⅲ-1）新帝国主義論 —はじめのはじめ— 中村共一 . . . 22

第19回市民科学研究会開催案内

コロナ禍の中で開催出来なかった市民科学研究会を、2年半ぶりに下記の内容で開催いたします。「市民科学通信」3月号から、ロシアのウクライナへの侵攻・侵略に関する原稿が掲載されています。3月4日には、軍事侵攻の即時停止の研究所理事会声明を出しました。考えさせられるのは、戦争の危機を感じた時、戦争がさし迫った時、また実際に戦争が起こった時、どう向き合えばよいのか。戦争に対峙し、それをくい止めるのは「市民のアソシエーション」の力です。では、この力とはいったい何か。「市民の科学」の課題として考えたいと思います。

日時；2022年8月28日（日）13:00～17:00

場所；市民科学京都研究所（右京区谷口垣ノ内町5-8）

テーマ；「戦争と『市民の科学』」（仮題）

報告題目と報告者；

1. 「『ウクライナ戦争』とは何か」（仮題）中村共一
2. 「反戦を掲げるドイツの劇場」（仮題）照井日出喜
3. 依頼中
4. 依頼中

【コラム】

「ありのままの自然」に想う

——朝永振一郎の問題提起——

重本冬水

(1)

このタイトルの「ありのままの自然」は朝永振一郎の言葉です。『市民の科学』第12号の「対論」（ついろん）で、青水さんは朝永の「物理学帝国主義」に言及されました（同誌91ページ）。40年ほど前に購入した『物理学とは何だろうか(上)(下)』（岩波新書、1979年）を読み返しました。「ありのままの自然」という言葉は(下)の「科学と文明」に記載されています（同上214ページ）。この新書の解説（松井卷之助）では、朝永の「講演記録」（同上227ページ）の一覧があり、これによれば「科学と文明」に関する最初の講演内容が1976年7月20日～9月24日の「立命館大学新聞」（9回連載）に掲載されています。この年の4月に私は立命館大学大学院経営学研究科修士課程に入学していますので、かすかな記憶がありますが掲載は知りませんでした。その後、朝永は同年10月19日の「岩波市民講座」で講演し、その内容が「科学と文明」として、この新書に収録されました（1979年7月8日逝去ですので新書は遺著と言えます）。

(2)

この「科学と文明」の講演の最後は、「地球物理学の問題」という小見出しになっています。理論物理学、素粒子物理学の朝永が、何故、地球物理学に言及したのか。それは「ありのままの自然」の主張に関わっています。朝永は次のように述べます。

「このへんで私のお話したいことは終るんですけど、先ほど自然のなかに隠れた、日常世界のなかにはあらわれてこないような、普遍的な自然法則を見つけるという目的だけが科学ではない、もっと違ったやり方をする科学もあるというお話をいたしましたので、その例をお話しておきたいと思います。一つの例は近ごろ問題になっております地震予知と関係のある地球物理学の問題であります」（同上218ページ）。

この前の小見出しは「科学のもう一つの面」となっており、この続きの内容が「地球物理学の問題」なのです。

私は、1970年の大学2回生の時、後期からの専門課程への移行のために、進みたい学科希望の書面を出しました。第1希望は物理学科、第2希望は地球物理学科、第3希望は農業土木学科（農業気象学講座）でした。大学入学当初は第1希望が農業土木、第2希望が地球物理でした。物理学科は希望学科ではありませんでした。今振り返れば朝永の言う「ありのままの自然」を対象とする自然科学を希望していました。学生運動の影響、特に理論物理学者の武谷三男の思想と哲学から強い影響を受け、また同じ理論物理学者の坂田昌一などの自然の階層性、三段階論などの影響から物理学科を第1希望とすることに変えました。定員30名の末尾でかろうじて物理学

科に移行しました。地球物理に進んでいけば人生は大きく変わっていただろうと思います。なお、当時の農学部は農業土木学科・農業気象学講座は、現在、生態環境物理学研究室になっており、気候変動などにも取り組んでいるようです。

朝永が「科学と文明」の最後で「科学のもう一つの面」として地球物理学の話に至っていることに「ため息」をつきながら50年前のこの学科移行の時のことを振り返っています。『市民の科学』12号の対論で「私の学生時代の意識はアクティビズムでした」（同誌89ページ）と述べました。「科学のもう一つの面」とか「ありのままの自然」という考えは、当時の私にはありませんでした。武谷理論を学ぶ中でも、この考えに気づくことはなかったのです。朝永は科学の今後を次のように述べています。

「もうこれ以上普遍性を追求するよりは、ありのままの自然のなかでどういう現象が起り、それがどういう法則に支配されるかという未知の分野を追求するほうが意味があるという時期がくるかもしれない。案外近い時期にくるかもしれない。そういうことを私は感じているわけです」（同上214ページ）。

1969年に入学した大学は、理系は理類として一括し、学生は2回生後期から農学部、理学部、工学部、薬学部、獣医学部の5学部35学科から希望学科を選択して、専門課程に移行していました（この制度のよい面は多いと思います）。なつかしい想いととも、この学科選択が、今になってその意味を考えることになったことを、忸怩たる想いで振り返っています。ちなみに、1200名ほどが理類に入学し、教養課程の成績でA、B、C、D、Eのランクに区分されます。Aランクの学生の学科が決まってからBランクへと移ります。当時、学生の間では、Aはアブノーマル、Bはベター、Cはコモン、Dはデラックス、Eはエリートと呼んでいました。私はアブノーマルの後ろの方でした。

(3)

「科学のもう一つの面」と関連して、朝永は「文明問題懇談会[※]」のメンバーの一人として次のような問題提起を行っています（同上229～230ページ）。

「自然科学、特に物理学や化学を生んだヨーロッパでは、それらが占星術や錬金術の成果を多く引き継いでいることから、科学の中には魔法ともいうべき何か恐ろしい、罰せられるべきものがあると考えられていた」。

この「何か恐ろしい、罰せられるべきもの」という考えは日本では極めて希薄です。これは何故なのか。朝永は続けて次のように言います。

「科学のもつ魔法的要素は、科学の発展とともに否定されるようになった。すなわち、17世紀には、科学は哲学と結合し、更に、宗教（キリスト教）とも和解した。18世紀には、科学は産業や技術と結び付き、産業革命の時代となり、19世紀には科学文明が謳歌された。日本はこの時期に科学技術を盛んに輸入した。しかし、20世紀に入り、原爆の出現は、物理学に対する考え方を換え、科学者のなかに原罪意識を持つ者がでてきた。にもかかわらず、科学者が恐ろしい兵器など、考えついたものは何でも作ってしまうとするのは、相互に対立している世界の政治構造の下では、競争相手に先を越されることを恐れる科学者の臆病さによるのではないか。同様に競争相手に敗れる恐れから企業も考えついたものは何でも作り、競って巨大化し自然破壊などを起こしてしまう」。

明治以降、科学文明が謳歌された時期に、日本は西欧科学技術を盛んに輸入した。だが、その前史は輸入しなかった。ドイツが東日本大震災の福島原発事故をうけて原発ゼロに舵をきった。この判断は倫理的な意味合いを強く含んだものであった。この判断の理由にヨーロッパにおける「科学のもつ魔法的要素」といった捉え方の歴史的背景があるのではないか。福島原発事故以後

の日本とドイツの原発政策の違いの根源的なものとしてこの歴史的背景を捉えたいと思います。

日本はあいかわらず「専門家の意見をふまえて」といった言説が様々なところで幅を利かせています。明治以降の科学技術の輸入・導入のスタンス（科学の歴史性と社会性の視点の欠如）は依然として続いています。朝永の問題提起はさらに科学の原罪性におよびます。

「科学そのものには良い、悪いはなく、これを使用する目的や方法に問題があるとする考え方は誤ってはいないと思うが、科学そのものと科学の使用とを明確に区別することは、考えられたものは何でも作るという状況では、難しいことである。むしろ、科学はそれ自身の中に毒を含んだもので、それが薬にもなりうると考えてはどうか。そして、人間は毒のある科学を薬にして生き続けなければならないとすれば、科学をやたらには使い過ぎることなく、副作用を最小限にとどめるように警戒していくことが必要なのではあるまいか」。

「考えられたものは何でも作るという状況」とは、現在の科学技術（者）のスタンスです。それは倫理的要素が科学そのものに組み込まれていない状況と言えます。この状況では「科学そのものと科学の使用とを明確に区別すること」は難しいと朝永は言います。さらに進めて「科学はそれ自身の中に毒を含んだもので、それが薬にもなりうる」と言います。つまり、科学は毒にもなり薬にもなるのではなく、“毒を含んだもので薬にもなりうる”と朝永は問題提起しているのです。科学の原罪性です。日本社会ではこのような科学観は極めて薄く弱い。それ故、「毒を含んだ科学」を主張すると「反科学」と批判されます。日本の科学観は、明治以降、変化はみられません。この日本の現実に対し、朝永は「毒のある科学を薬にして生き続けなければならない」と問題提起したのです。

※1975年の初春に発足した「文明問題懇談会」は永井道雄文部大臣によって設置された大臣諮問機関です。同年3月から翌年3月までの1年間、会合がもたれました。参加者の専門分野は、哲学、文化人類学、思想史、歴史、比較文化、経済学、生物学、物理学などです。

(4)

私は物理学科卒業、満50年となりました。当時の教科書も捨てずに本棚に置いたままです。朝永の『物理学読本』、『量子力学I、II』も大切に保存しています。当時、親からの仕送りを削って購入した武谷三男の『著作集』（全6巻）と『自然科学概論』（全3巻）も置いたままです。学生時代における自然科学に関する思想・哲学へのこだわりが未だ残存している自分に驚いています。

朝永の「ありのままの自然」を対象とすることの意味を考えながら、(2)でふれました専門課程への移行の時、「ありのままの自然」を対象とする地球物理あるいは農業気象へ移行していればとの想いも残存しています。教養課程での成績が少しだけ違っていれば第2か第3希望の学科へ進んでいました。「ありのままの自然」を研究していれば、その後の人生は大きく変わっていただろうと思います。それが良かったか悪かったかは別にして。

「毒のある科学」（科学の原罪性）などといった思想・哲学は、その当時の私にはありませんでした。やはり「普遍性」を追求するためのアクテビズムであったとの想いが、今も忸怩たる想いで残ります。

(しげもと どうすい)

【美術展紹介】 モディリアーニ展

照井 日出喜

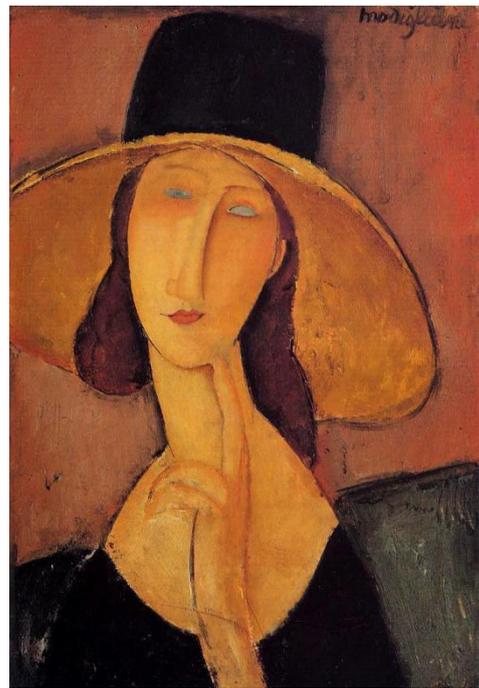
大阪中之島美術館で、今年の7月18日まで、開館記念特別展として「モディリアーニ —愛と創作に捧げた35年—」が開催されている。

ジェラルド・フィリップ（1922～1959）がユダヤ系のイタリア出身の画家アメデオ・モディリアーニ（1884～1920）を演じた映画《モンパルナスの灯》（ジャック・ベッケル監督、1958年）は、アルコールに身を持ち崩し、極貧のなかで結核に苛まれつつ来世へと旅立つ青年の凄絶な人生（フィリップとモディリアーニは、双方とも奇しくも35歳の若さで現世に別れを告げている）を再現するとともに、美術が「商品」として、アーティストの意志とはまったく無関係に、画商の手によって社会のなかを流通する酷薄な現実をも描き出す——生前、数フランのカネを求めてパリの街を彷徨したモディリアーニが描いた《横たわる裸婦》が、ほぼ100年後の2015年11月、競売で1億7040万ドル〔約210億円〕で落札されたのは象徴的にして典型的であるが、モディリアーニたち、国外から来た貧しい画家たちを取り巻く当時の苛酷な状況は、以下の例によっても明らかである。

モディリアーニの専属契約を得ていたズボロフスキー（注1）が窮乏の極みに瀕していたとき、シェロン（注2）は彼にモディリアーニを貸し出させた。元私設馬券屋は、自分のギャラリーの、換気窓が唯一の光源である地下室に画家を住ませた。モデル——と言っても自分の女中だが——を提供し、ワインやジンを好きなだけ飲ませながら、毎日1点絵を描かせ、15フランで買い取ったそれを乾く間もないうちに200フランで販売していた（注3）。

1917年以降の伴侶だったジャンヌ・エビュテルヌ（《モンパルナスの灯》では、クロード・ルルーシュ監督の1966年の《男と女》でも知られるアヌーク・エーメが演じている）は、モディリアーニの死の翌日、身重だったにも関わらず、実家の6階の窓から身を投げて彼の後を追う。ジャンヌの両親は、彼女がモディリアーニの墓にいっしょに埋葬されることを、長い間、頑なに拒否した（ほぼ同じ時期の、島村抱月の後を追って自死した松井須磨子の遺骨の運命を想起させる）。残された遺児の、当時2歳だった（母と同じ名の）ジャンヌは、長じてフランスの対ナチスのレジスタンスに加わり（彼女もまた、当然ユダヤ系であるから、ナチスは不倶戴天の敵である（注4））、その後は美術史家となって、父の作品についての著作も書くにいたる。

「モディリアーニは芸術家をニーチェ的な意味の『超人』だとみなしていた。すなわち芸術家は恵まれた資質をもつと同時に、それによって苦しみを受ける運命に置かれた、選ばれたアウトサイダーなのである」（注5）。モンパルナスではアルコールと薬物に取り憑かれた挙句（注6）、仲間と大喧嘩をするのも日課の一つであった典型的な「破滅型」のモディリアーニにしては、随



左はジャンヌ・エビュテルヌ、右はモディリアーニによる彼女の肖像画の一つ

分、殊勝な「自己規定」を吐露したものであるが、彼にはたしかに、フランスに渡る前の少年時代からダンテやニーチェに親しむほどの卓越した文学的感覚の持ち主だったという説もあり（注7）、その限りでは、芸術家の存在を「選ばれたアウトサイダー」として、「超人」に擬する発想を持つにふさわしかったのかも知れない。他方、「彼は新しい芸術運動の先駆者でもなく、また開拓者でもなかった。むしろ様式的にはかなり孤立したアウトサイダーなのであり、彼の際立った裸婦像がこの注目すべき役割をきわめてわかりやすく示している」（注8）という美術史家の指摘は、わたしにとって示唆に富むものである——それというのも、第一次世界大戦を挟んで、1910年代から20年代へといたる時期のヨーロッパには、20世紀の殺戮と廢墟の歴史を突き抜けてその名を残すアーティストたちが、さまざまな領域において凄まじいばかりの勢いで輩出するのであるが、それはまさしく「先駆者たち」と「開拓者たち」、したがってまた「破壊者たち」の一群であることが稀ではなかったからであり、モディリアーニの諸作品にあっては、それほどの破壊的エネルギーの放射を感じ取ることが（わたしには）できないからである。第一次世界大戦という、言うなればヨーロッパ文明そのものが内包していたはずの価値観を根底から打ち砕く出来事を経て、20年代にはシュールレアリスムやダダイズム、抽象絵画といった、ロシアにおける革命後の運動を含めて、いわゆるアヴァンギャルド（前衛）が、過去の抹殺をめざす芸術運動として次々に生まれ出てくるのであるが、モディリアーニ自身は1920年にはすでに亡くなっていることもあるにせよ、ヨーロッパを戦場とする戦争が強制した精神的惨状に美的感性を携えて対峙するような作品群は、おそらく残されてはいないのではないと思われる。

その点では、ピカソ、フォーヴィスム時代のマティス、ダダイストのツァラ、シュールレアリストのマン・レイやマックス・エルンスト等々とは、モディリアーニは明らかに異なる系統に属するのであるが、しかし、現在の時点でローランサンやシャガール、ユトリロ、さらには藤田嗣治や佐伯祐三の作品を前にすると、「かなり孤立したアウトサイダー」であることは、たしかにアーティストの「王道」の一つに属するものであることもまた明らかである。

なお、今回の展示には、美術館によって以下のような説明が加えられている。

「20世紀前期のパリで活動したモディリアーニは、『エコール・ド・パリ』の一員として、ピカソやシャガール、藤田嗣治などと同世代です。本展では、そうした仲間たちの作品も多数紹介、彼らの交流をご紹介します。パリに吹いた新しい風とともに、モディリアーニ芸術が成立する軌跡をたどります」。

([モディリアーニ —愛と創作に捧げた35年— | 大阪中之島美術館 \(nakka-art.jp\)](#))

「パリに吹いた新しい風」は、それほど清潔でも涼やかでもなかったには違いないが、前述のマックス・ジャコブが命名したという集合アトリエ「洗濯船」に棲みついたボヘミアンたちの制作の一端（藤田の裸婦と猫を含む）は、この展覧会のかなりの部分を占めている。

- (注1) モディリアーニが信頼を寄せていた画商。モディリアーニが描いた何枚かの肖像画によっても知られる。
- (注2) 元私設馬券屋で南仏ベジエのワイン卸売商。若き日の藤田嗣治と「フランスの最初の妻」のフェルナンド・バレイは、彼と7年におよぶ契約を持続し、毎日2枚の水彩画かグワッシュ（不透明水彩画）を彼に届けることで、毎月450フランの生活の資を得ることができたという（J.P.クレスベル/藤田尊潮訳『モンパルナスのエコール・ド・パリ』、八坂書房、2013年、「V フジタ 切れ長の目のドン・ファン」、194頁以下、参照）。
- (注3) 同書、27頁。この著作によれば、「エコール・ド・パリ」の若き芸術家たちは、多かれ少なかれこのような「奴隷労働」によって露命を繋いでいた。
- (注4) ナチスによるユダヤ人狩りの犠牲となって、「モンパルナスのユダヤ人画家たちが包囲され、強制収容所へ送られた——86名ものユダヤ人画家および彫刻家が絶滅キャンプへと送った」（同書、56頁）とされている。例えば1916年にモディリアーニが何点かの肖像画を描いた詩人で画家にして信頼する親友であったマックス・ジャコブは、1944年2月24日に逮捕され、10日後の3月6日に強制収容所で世を去った。モンパルナスで青年時代を送った貧しいユダヤ系のボヘミアンたちの多くにも、ナチスあるいはヴィシー政権の統治下の時代には、ひたすら非業の死が待ち受けていたのである。
- (注5) アネッテ・クルシンスキー/諸川春樹訳『アメデオ・モディリアーニ 裸婦と肖像』、岩波書店、2010年、16頁。
- (注6) ジャンヌとの間にベビーが産まれたあと、モディリアーニには「しばらくは美術商のズボロウスキーから月々一定額の金——三千フラン——が届けられた。金はたちまちワインとアブサン、ハシシュあるいはコカインに消えた」（ウィリアム・ワイザー/岩崎力訳『祝祭と狂乱の日々 1920年代パリ』、河出書房新社、1986年、9頁）。
- (注7) 前掲、アネッテ・クルシンスキー、14頁、参照。
- (注8) 同書、110頁。

(てるい ひでき)

ゼミ卒業生に送る言葉

塩小路橋宅三

皆さん、私は卒業おめでとうなんて口が裂けても言えません。この専門課程での二年間、満足に学修活動もできずに、ところてんのように突き出すことは犯罪に等しいと考えているからです。決して許されることではないと考えている私が、卒業証書を皆さんに手渡して握手するなんて行為は「盗人猛々しい」そのものですが、それが雇用社会における感情労働なのです。この後の全体卒業式において、祝辞として「卒業おめでとう」などという人の言葉を信じてはいけません。なぜならば、皆さんをモノ扱いにして、ベルトコンベア上で手抜きによる欠陥不良品と知りながら市場に商品として送り出す経営者に等しいからです。

もう終わったことですが、告白します。大学ではシラバスがあって、それを読んで登録しろと言っていますが、シラバスは嘘ばかりです。もし、シラバス通りに講義をしている教員がいるならば、その教員の質を疑ってください。おそらく無意味な講義を悪気なしにやっているはずです。私は講義やゼミは学生とともに創っていくものと考えています。嘘の最たることは、予習復習を一科目について四時間もやれば、皆さんは寝る時間も無くなります。二単位の認定のためには講義出席だけでなく自習が必要と説明されますが、これからは何としても卒業認定単位制度やシラバスによる科目登録を形骸化していかなくてはなりません。

さらに、世の中はグレーなことばかりです。それに馴染むように訓練するキャリア教育とは犯罪的です。キャリア教育という名の型にはめる「就職教育」であって、本当に必要なことは職業倫理などを考える「職業教育」です。社会的に働くということの意味を考えてください。世の中はブラックもしくはグレーなのだから、それに慣れるような教育と称する訓練は大学では行うべきではありません。されど、就職率向上のために就活セミナーが行われているのが現実です。これは皆さんのためにやっていることではなく、学校の偏差値を上げるためにやっています。なにゆえに大学同士が競争しなければならないのでしょうか。

ところで皆さん、就職するための活動は大変だったと思います。このコロナ禍がなかったとしても学業に専念する時間はなかったかもしれません。それが当たり前と思わないでください。企業による大学教育への妨害ととらえてください。この妨害に対して抗議もせずに公欠扱いをする大学は情けないの一言に尽きます。仕官するための「武士の科学」は為政者の学問になりがちです。そうではなくて、「町人の科学」、民衆の知恵こそが大事であるとゼミでは言ってきましたが、グレーな社会において知識よりも知恵を実感されると思います。多量の知識の中で溺れつつ悩んでください。悩むことが人間を大きくします。学校を通じての私と皆さんとの関係は終わりますが、個人と個人のお付き合いはこれからです。借金以外のことは何でもウェルカムです。悩みを聞かせてください。

かつての首相の中には他人の話を見聞かずに側近の甘言をそのまま実行した人物も見受けられましたが、逆に他人の話は聞くが実行できない首相も困ったものです。もう皆さんは気づいておられると思いますが、政治とは複雑な力学的均衡です。しかしながら、政治とは身近なものなのです。選挙で一票を投じることなどは政治に参加しているとの自己満足の免罪符に過ぎない。選挙とは決して人気投票ではありません。本当は複数の候補者から選び出す規範といった政治教育も

やりたかったのですが、申し訳ありません。素人のほうが良いと言うレイマンコントロールと、反知性主義のポピュリズムとは別物です。大阪では強権的な国家主義政党が力を増してきていますが、皆さんはこれでよいと思われませんか。皆さんの未来はこれまでの人生の何倍もあります。残念ながら私の未来は少なくなってきましたが、皆さんの未来を面識もない政治家が決めようとしています。理論と実践において、意に反するような政治家の決定には抗議行動として市民的不服従を貫いてください。民主主義は民主主義が潰すこととなります。この意味をしっかりと考えてください。

世間では知識を詰め込んで、銀行預金引き出しのように披露できる人材が重宝されます。しかし、私は違います。社会に対して知識を知恵として実践できる人材を評価します。日本の教育が受験のための詰め込み教育といわれて久しいですが、知識を知識として再生産するのではなく、知恵として燃焼してください。地球上のあらゆる物質はエントロピーの法則により増大して気体となります。これを酸化といいます。短時間に気体化することを燃焼と称します。回りくどい説明でしたが、知識を知識として塩漬けするのではなく、燃焼を心がけてください。学問とは学びを問うことです。皆さんは単なる物知りになるのではなく、得た知識を生かしてください。ゼミでは口酸っぱく言いましたので、大丈夫ですね。

最後に、このようなコロナ禍において親友が3人出来ましたでしょうか。ネット環境の発展により、300人ぐらいの知り合いはいるでしょうね。知り合いとは、顔を見れば名前もしくはどのような人物かが判明できる人です。その中で30人ぐらいは友達と呼べるでしょうか。少なくともこちらが友達と思っているだけで十分です。さらに、その中で3人ぐらいは向こうも親友と思っている人がいますか。何の利害関係もないのに困ったときに相談に乗ってくれる人です。まさか、そんなのは親だけという人はいませんか。最近では親にも相談できないことばかりですからね。

皆さんは資本主義社会における企業に雇用されることとなります。資本主義とは拡大再生産のための価値増殖とそれを資本に転化するための利潤極大化を求める企業による競争社会です。これもゼミで何度も言いましたから分かってくれましたですね。あるゼミ生はそんな社会に行きたくないと言われてましたね。それが正常な感覚です。そこで、企業の内部から変革することには限界があることも承知してくれてますね。そうではなくて、私たちの社会を創っていかなくてはならないのです。これが本当の変革です。

ゼミでも何度も言いましたが、是非ミヒャエル・エンデの『モモ』とジョージ・オーウェルの『1984年』を読んでください。そこでの話題を提供してくれることを楽しみに待っています。

(しおこうじばし たくぞう)



ジェームズ・ブラッドワース著『アマ ゾンの倉庫で絶望し、ウーバーの車で 発狂した』（濱野大道訳、光文社、 2019年）を読む

—— Tさんへ ——

篠原三郎

一

Tさん ありがとう。おすすめの本、さっそく手に入れ読みました。入手の方法も言われたように「アマゾン」経由です。なによりタイトルがタイトルでサスペンスドラマかなと一瞬感じたほどですが、また長いタイトルに面白みもありました。そしたら原書名は“HIRED”の一語なんですね。びっくりしました。あらためて表紙をよく見なおしたら、サブタイトルがあって小さな文字で「潜入・最低賃金労働者の現場」とあるのに気づき、なんだか分からないけど「そうか!？」の気分になって、さっそく読みはじめたんです。ちなみに、裏表紙には、これは出版社の広告用なんでしょうが、以下のように書いてあるんですね。

「これは『異国の話』ではない」

「英国で“最底辺”の労働にジャーナリストが自ら就き、体験を赤裸々に報告。働いたのはアマゾンの倉庫、訪問介護、コールセンター、ウーバーのタクシー。私たちの何気ないワンクリックに翻弄される無力な労働者たちの現場から見てきたのは、マルクスやオーウエルが予言した資本主義、管理社会の極地である。グローバル企業による「ギグ・エコノミー」という名の搾取、移民労働者への現地人の不満、持つ者と持たざる者との一層の格差拡大は、我が国でもすでに始まっている現実だ」。

とにかく可能な限りを尽くされたさまざまな管理技術、制度によって労働者がいかに支配されているかが、リアルに展開されてます。他人事には思えませんでした。読書中、驚き、溜息の連続です。（「アマゾン」経由による入手のこのの意味も理解できました。）

二

著者のジェームズ・ブラッドワースさん、自ら体験しながら労働現場の現実を取材していくん

ですね。その成果は、まさにタイトルのごときもの、多くの人に知ってもらいたい、そのためにも読んでもらいたい本です。その上でのことですが、わたし個人として強く引き付けられたことがありました。この取材の方法です。ドキュメンタリーへの姿勢です。こうやってしまいました。その前に「最低賃金労働者の現場」の調査に何故取り組んだ、といった問題があった筈ですよ。これをめぐる「はじめに」の話が印象的でした。ジャーナリストとしての著者の誠実さに感銘しました。

母子家庭で4人きょうだいのうち著者一人だけが大学にいけたとあります。貧しい労働者階級のものには「本や記事を書き上げる」生活の余裕がない、21世紀の英国社会の不条理を踏まえつつ、このドキュメンタリーを書き上げているんですね。その辺りの著者の話にいろいろ考えさせられたのです。

ドキュメンタリーといえば、日本のドキュメンタリーの古典とも評されている鎌田慧さんの『自動車絶望工場—ある季節工の日記—』（現代史出版会、1973年）が思い出されます。20世紀の日本の高度経済成長期、非人間的状況下に働かされていたトヨタの労働者の実態を、生々しくわたしたちに知らせてくれました。鎌田さんも自ら季節工となってベルトコンベアの前にたって労働体験をしているんです。そのドキュメンタリーからも、今思い返せば、時間を越え国を越えブラッドワースさんのそれと共通するものが感じられました。それが誠実であり、また、知的発条となってポジティブな想像力として働きだすのではないのでしょうか。テッサ・モリス＝スズキさんの言葉をかりれば「批判的想像力」（『批判的想像力のために』（平凡社、2013年）とも言えるのではないのでしょうか。

話が戻りますが、Tさん ブラッドワースさんのこの著書、オーウェル賞を受賞されたんですね。そんなこともあって、この機会にとおもい、オーウェルの『1984年』、『動物農場』をあらためて読み直してみました。日本では川端康雄さんの『ジョージ・オーウェル「人間らしき」への賛歌』（岩波新書、2020年）でも指摘されているように、オーウェルは「反ソ」「反共」だと、“進歩的”知識人の間でかつて不評の時代がありました。困った偏見です。オーウェルの作品も優れた批判的想像力がよく発揮されているのではないかと、やはり感じましたね。いまのロシア、中国らはいまでもなく、日本、アメリカなど、社会の情報化がすすんでいるいずれの国家も、ネーションにとって油断も隙もありません。オーウェルも広く多くの人に読んでもらいたい古典です。

ともあれ、お薦めいただいたブラッドワースさんのおかげで知見が広がった思いしております。ありがとうございます。

なお、書き忘れたことがあります。米国のニューヨーク市にあるアマゾンの倉庫で、4月1日、労働組合の結成が可決されたというニュースが朝日新聞（5月16日）に紹介されました。喝采したいです。

国を越えまた時を越えおもしろく一気に読みぬ『動物農場』

2022年6月1日、記
(しのはら さぶろう)

「社会的労働」と社会主義（上）

—柄谷行人練習帳⑮—

香椎五郎

(ペンネーム)

資本主義における「機械と大工業」において、そこでの労働が「社会的労働」であり、またそこでの労働手段が「社会的労働手段」であるという解釈があることを指摘しました。それは、マルクスが『資本論』において言明したことによって、正当性をえたものと思われています。

しかし、柄谷さんの「社会性」の理解とは少なからず隔たっているように思います。柄谷さんの理解に難点があるのか、思案の正念場、考えどころとなりました。今回は、社会主義が拠って立つ思考方法と関連付けて検討したいと思います。

ロシアによる「ウクライナ侵攻」が世界に衝撃を与えています。その「衝撃」の意味は多様にあります。単に、ロシアとウクライナ間の戦闘行為ではなく、一方のアメリカを中心とする同盟国と、他方の反米を旨とする中国などを巻き込んだ、事実上の「世界大戦」あるいは「世界代理戦争」であるということが、そのひとつです。この点は、中村[2022]①②で学びました。

そして看過できないのは、かつての「社会主義国」のロシアや中国、北朝鮮がいとも簡単に軍事行動を誇示し、正当化していることです。ここに至って、“社会主義”のイメージダウンは必至です。それは「マルクス主義」や「共産主義」への絶対的な拒絶、根源的な不信をもたらしているのではないか、と思うのです。「驚き」を超えた「絶望」にも似た嘆きのなかに、私はあります。このままでよいわけがありません。



社会的分業、社会的労働、社会的生産手段など、いずれも「生産様式」に関わった重要な概念です。しかし、柄谷さんの交換様式論からすれば、その決定的問題は実に「社会的」という論点にあります。「柄谷行人練習帳⑮」で取り上げた「事前」と「事後」の話を想起するのですが、結論からいえば、生産過程だけで社会性を認めることはできないのであって、というか、「事前」という限定された生産過程の段階では、その労働だけでなく生産手段についても「社会性」を持つことは未定であり、不明であるということです。「交換」という流通過程での「事後」を俟ってはじめて「社会性」が明らかになります。実際、マルクスの手による全巻の編集ではなかった

けれど、『資本論』では「資本主義的生産の総過程」を射程においていたわけですから、生産過程にのみ注視していたとは思えません。つまり、ひとり「生産過程」にのみ「社会性」があるのではなく、「総過程」に「社会性」があるということです。

もとより、私的で閉じた労働は、そもそもから「価値」ということとは無縁の営為です。労働それ自体を無条件に「価値」と考えることもできますが、それは単なる言い換えであり、労働の社会的意味を問う道を閉ざしてしまいます。その労働が、他者に認められるかどうかという局面で初めて「価値」ということが問題になります。つまり、「価値」というのは社会的な関係のなかで形成されるということです。あるいは、「価値」とは社会関係そのものだということもできます。繰り返しになりますが、私の戸惑い、考えを改めて整理したいと思います。

個別の、点在する「作業場」や「工場」における「共同労働」は、一人ひとりの「個別労働」が集合して「結合労働」になります。その指揮・監督は、マルクスによれば、マニュファクチュアの場合「主観的」に行われ、機械制大工業では「客観的」に行われるという相違があります。それは、その限りでの理解なのですが、マニュファクチュアの「主観的」とは、親方の経験や勘にたよった熟練や職人技のことを指しており、後者の「客観的」というのは、その経験値に拠るのではなく、個人名から解放された科学技術が示す合理的な指針を意味しています。ただ、いずれも「作業場」「工場」の敷地内での資本運動に動機づけられた話です。門の外は、これまでの経験値や科学技術や法則の及ばない世界のあることが深刻な問題です。文字通りの「社会問題」です。にもかかわらず、マルクスが、敷地内の労働に「社会的」という冠をつけているのはなぜなのでしょう。



個人の労働から共同の労働へ転化したので、その労働が「社会性」を持つというのは論外です。囚人労働や強制労働が「結合労働」であっても、それを指して「社会的労働」と言って、なにがしかの積極的な意味を読み取ることはできません。しかし、そうではない、という読み方も『資本論』では可能です。それは、結合労働、部分労働の担い手が「賃労働者」であるということにポイントがあると思うのです。

つまり、労働の「社会性」を言うのであれば、労働力が商品化されていることこそが、労働の社会性を意味しているということです。労働力が「自由」に売買される対象になったという歴史的な事件です。

家族や地域の見知った人びととの共同労働では、同じ「規則」に従って各々の労働が進むと思うのです。しかし、労働力が商品化するという事は、自らの労働力を「見知らぬ」他者へ提供することを意味しています。「社会性」への「命がけの飛躍」の行動です。マルクスが「社会的労働」論を提起しているのは、結合労働や集団労働それ自体を意味しているのではなく、資本の下にあって、多様に異なった個々の労働者の「アソシエーション」を想定していたのではないかと、そう推察します。この労働力諸品の「命がけの飛躍」が社会的労働の第一段階であるとすれば、次の「飛躍」は生産物の商品交換であり、社会的労働の第二段階です。資本主義的市場経済においては、「社会的労働」は二段の「飛躍」をくぐりぬけて価値を生み出すのです。

繰り返します。「機械と大工業」の下では、多数の、相互に「他者」である労働者が、資本の指揮のもとで「共同労働」を行います。かつての、血縁や地縁で結びつけられた「共同労働」とは全く異なった「規則」が必要になります。マニュファクチュアでは、労働過程あるいは生産過程を親方や経営者の「主観」によって制御することは可能だったでしょう。しかし、機械制大工業において多数の賃金労働者を束ねることは、工場長や経営者にとっては至難であったのではないのでしょうか。そこで重要不可欠な役割を果たすのが科学であり、その科学に裏付けられた技術

の存在です。こうして、資本化された技術によって生産された商品は、いよいよ最終的な交換局面に向かいます。折角の商品（生産物）が破棄されるか、それとも首尾よく買い手（貨幣所有者）を見出すか、社会的労働であることを示す場です。

しかし、すでに紹介したように、マルクスは「機械は、のちに述べるいくつかの例外を除いては、直接に社会化された労働すなわち共同的な労働によってのみ機能する。だから、労働過程の協業的性格は、今では、労働手段そのものの性質によって命ぜられた技術的必然となるのである」（マルクス[1968]503頁、下線は香椎）、と述べていました。理解することが難しいのは、「直接に社会化された労働すなわち共同的な労働」、そして「労働手段そのものの性質によって命ぜられた技術的必然」という指摘です。

そこで、思い直して、資本制生産様式における剰余価値生産についてのマルクスの説明に、耳を傾けることにします。労働力商品の売買を前提にしながら、つまり私の言い方ですが「歴史的な事件」とでもいふべき労働力商品の「消費」と言いながら、マルクスはその労働過程を、まずは一般的に論じる方法をとります。

…労働過程はまず第一にどんな特定の社会的形態にもかかわりなく考察されなければならないのである（マルクス [1968] 223 頁）。

その前に、その理由、根拠として使用価値生産を挙げています。

使用価値または財貨の生産は、それが資本家のために資本家の監督のもとで行われることによって、その一般的な性質を変えるものではない（同上）。

後の「マルクス経済学」で、使用価値や労働過程を「歴史貫通的」なものとして理解する根拠にもなった有名なマルクスの命題です。「どんな特定の社会的形態にもかかわりなく」、「一般的な性質」をもった使用価値や労働過程を考察するというのは、一体どのような意味なり、意義をもっているのでしょうか、考え込んでしまいます。その“一般性”とは、過去の、歴史上の労働過程を俯瞰した一般性であり、また未来の労働過程にも通じる“一般性”とも理解されます。だから、「どんな特定の社会的形態」をも排除する、没歴史的なものとして理解してよいと思います。日常会話でも言われているような、“一般論”で片づけていると言ってよいのかもしれませんが。しかし、マルクスの意図がそこにあったとは思えません。後で触れるように、「一般性」は「普遍性」とは意味が異なります。少なくとも、柄谷さんはそう考えています。

もう一度、マルクス『資本論』第13章「機械と大工業」を振り返ってみます。



冒頭の言葉は明快です。「資本主義的に使用される機械の目的は」「剰余価値を生産するための手段なのである」（マルクス [1968] 485 頁）と述べ、「まず第一に究明しなければならないのは、なにによって労働手段は道具から機械に転化されるのか、またはなにによって機械は手工業用具と区別されるのか、である」（同上、486 頁）と述べています。このなかの、「なにによって」の「なに」とは“技術”です。そのように理解できる説明が注記のなかにあります。

技術学は、自然にたいする人間の能動的な態度をあらわに示しており、人間の生活の、したがってまた人間の社会的な生活関係やそこから生ずる精神的諸観念の直接的生産過程をあらわに示している」（同上、487 頁）。

こうして、先の「機械は、のちに述べるいくつかの例外を除いては、直接に社会化された労働すなわち共同的な労働によってのみ機能する。だから、労働過程の協業的性格は、今では、労働手段そのものの性質によって命ぜられた技術的必然となるのである」という指摘の真意がつかめたように思うのです。「直接に社会化された労働」と「共同的な労働」はイコールであり、また「協業的性格」とも等しいだけでなく、それが「労働手段そのものの性質によって命ぜられた技術的必然」というのですから、そこには歴史的な資本制の制約なり条件は度外視されています。先の「労働過程はまず第一にどんな特定の社会的形態にもかかわりなく考察されなければならないのである」という命題はここでも生きているのです。

柄谷さんは、「事前」と「事後」の「総合」のなかに社会性を認めていました。しかし、ここで取り上げたマルクスの社会性は、「事前」と「事後」の区別を問わない“一般的”な社会性としての意味合いでした。この違いは重要な問題を孕んでいるように思います。これから述べることになる“社会主義”との関連でいえば、「一般的」なる方法概念をもう少し掘り下げて考える必要があるようです。ポイントは「一般性」と「普遍性」の区別です。

柄谷さんは、「まず、一般性と普遍性を区別する。これらはほとんどつねに混同されている」（柄谷[2010]150頁）と述べて、カントを援用してマルクスへの独特なアプローチをしています。

…カントの言葉でいえば、一般性—個別性は経験的であり、普遍性—単独性は超越論的である」（同上、154頁）。

…マルクスの「転回」には、ヘーゲルの単なる唯物論的な「転倒」ではなく、個体—類あるいは個別性—一般性の回路を「切断」するような、単独性—普遍性という回路の出現が不可欠だったのだ」（同上 155頁）。

この指摘のなかに、「社会的労働」と社会主義との極めて濃密な関係を読み取るヒントがあるように思われます。ただし、紙幅の関係もあるので、ここでは中兼和津次さんの問題提起を紹介するにとどめ、次回に検討を加えることにします。社会主義における自由の問題も、社会的労働論から考えたいというのが私の本意です。



社会主義について、たとえば中兼[2018]では次のように述べています。

資本主義では私有制と市場制度が、社会主義では公有制と計画制度が体制を動かす核心的メカニズムになっている（85頁）。

さらに、社会主義の理念が「宗教性」をもっており、そこに憎しみや暴力性のあることを読み取ろうとしています。

理念の追求という点では社会主義者の方が資本主義擁護者よりはるかに強烈であり、そうであるからこそ、社会主義者同士の対立は激化し、往々にして憎しみ合い、敵対する。マルクスからレーニン、さらにはその弟子であるスターリンたちが対立する社会主義・共産主義者たちを、いかに激しい、われわれからすると汚い言葉を使って罵ってきたのか。そして時には、（マルクスらは別だが）暗殺や処刑という手段を使っ

て対立者を抹殺してきた歴史を見ると、社会主義理念がイデオロギーとしてある種の宗教性を持っていたことが理解できよう（85頁）。

こうした社会主義者の理念論（以下、社会主義像と呼ぶ）は、彼らが政権を取ると急速に、また一気に変わってくる。これをわれわれは空想から現実への社会主義像の転換と捉える。空想的理念ではなく、現実的理念が打ち出され、そのもとで具体的政策が策定されていく。しかし同時に空想が変質していく中でさまざま暴力が用いられ、しかもマルクスたちが想像だにできなかった奇怪な社会主義像が姿を現してくる（86頁）。

ここで論じられている“社会主義”は、「公有制と計画制度」という「現実的理念」の下で進行した文字通りの「自由」の抹殺です。この「現実的理念」の基本にあるのが「労働価値」論に根拠を置き、「個別性—一般性」の「回路」にある「社会的労働論」であると考えられます。

（つづく）

（かしい ごろう）

引用したのは、以下の文献です。なお、ご質問、ご意見、ご批判を待っています。

柄谷行人[2010] 『トランスクリティーク カントとマルクス』岩波現代文庫
中兼和津次[2018] 「空想から現実へ—マルクス、レーニン、スターリン、毛沢東、
鄧小平に見られる社会主義の変遷—」 『比較経済研究』第55巻
第2号
中村共一[2022]① 「『ウクライナ戦争』とは何か？—善悪論のまえに—（上）」
『市民科学通信』第23号
中村共一[2022]② 「『ウクライナ戦争』とは何か？—善悪論のまえに—（下）」
『市民科学通信』第24号
マルクス [1968] 『資本論』（第一巻第一部）大月書店



個性とは何か（1）

—主我と客我の循環をわがものにすること—

竹内 真澄

はじめに

大都市の地下街を毎朝、何千、何万というサラリーマンが同速度で歩いてゆく。その行列の中でぼくはこう考える。沈黙した人々が奏でる靴音のなかで、人々はまるで誰かが統制したかのよう、ある塊（アグレガシオン）をつくっている。しかしだれかが号令をかけたわけではけっしてないのだ。この行列は、ある者は阪急梅田駅、ある者は JR 大阪駅、またある者は堂島方面のオフィス街へ枝分かれしてゆく。最後には分散してそれぞれの職場へ吸い込まれるだろう。

この行列は一見すると働きアリの行列によく似ている。しかしアリとは違って、この行列の中で一人一人はまったく違うことを考えているにちがいない。ある者は、今日課長に叱られるかもしれないと思い、またある者は同僚と昼ご飯に何を食べようかと考え、またある者は帰宅してからの自分の誕生日を家族とともに過ごすことを考えているだろう。

これが現実の多次元性という事態である。現実、外見上はただ多数の歩行という物質性である。しかし、じつはそうではなく、この物質性と平行して人びとの主観的世界を考慮に入れると、靴音の世界に張り付いて進行するもう一つの多様な主観的世界があることは疑いを容れない。靴音の轟音と平行して、しかし、それとはまったく対照的な沈黙の主観的世界が存在することがわかる。誰もがこの沈黙の音を聞きながら歩いている。

サラリーマンの行列は、こうした各私的主観性をともなっているものではあるが、総体として諸資本への従属を宿命とするところのまったく無個人的な行列である。いつかぼくは誰かの短歌を読んだことがある。読み手はこう言っていた。黙々と歩くサラリーマンの背中を蹴ってやりたい。読み手も実は行列の中におり、ある意味では蹴られるべき存在の一人なのだが、歌の世界で彼は前を歩くサラリーマンの誰かに対して理不尽な、しかし状況総体に対する合理的な怒りを抱いており、それが自分にも反照してくることを知っているようだった。

本稿が主題とするのは、自我の構造的特質をミードに学びながら個性の本質に迫ることである。ミード（アメリカ G. H. Mead, 1863-1931 代表作に『精神・自我・社会』1934年がある）には優れた自我論がある。すなわち自我が自己自身を対象化することで社会的に生きることが可能になるという重要な洞察がそれである。だが、ミードにはさほど豊かな資本主義分析がない。他方で人間はアソシエーション社会で個性を獲得するというマルクスの歴史的テーゼがある。マルクスにはミードほどに豊かな構造的自我論はないが、歴史的資本主義分析がある。両者には構造と歴史に関する一長一短がある。そこで、本稿ではミードに歴史的資本主義論を接合し、マルクスに構造的自我論をむすびつけて、それらの交点で個性論を豊かに規定してみたいと思う。本稿はその試論である。

1. 自我と客我

まず、ミードの自我論から入っていこう。自我論で有名なミードは、自我 self を主我「I」と客我「Me」に分ける。そのうえで主我は客我を対象化するが、自分自身を対象化することはできないと述べている。「I」がスポットライトを浴びることはないというわけである。「わたしは進行中の自分をつかまえられるほどすばやく振り返ることができない」と彼は述べている。「客我」は、さしあたり自己内部で自己を対象化することで得られる。「I」は一瞬前の「I」を対象化する。これによって「I」は過去化される。これが「Me」である。たとえばぼくが日記をつけるとき、今、日記を書いているのは「I」である。この「I」はまだ対象化されない現在進行中の「I」である。夜ぼくは日記を書くとしよう。そのときぼくは今日一日の出来事を振り返り、ぼくが何を思考し、何をなしたかを反省する。こうして反省され、過去化された「I」が「Me」（客我）となる。しかし、対象化しえないものがある。それはいま日記を書いている「I」そのものだ。今書いている「I」を対象化し、「ぼくはその夜日記を書いた」とするためには、翌日の朝の「I」を生きねばならない。それゆえミードがいう「I」の創発性 emergency とは、「I」の前対象化的性格のことであると言えるだろう。

このように人間の認識構造には遡及不能な「I」を、前提に置かざるを得ないという特徴がある。たとえばわたしが外界をみている場合、今見ている風景は、このぼくが見ている風景であり、このぼくの視点からしか見えないものである。人間と自然の関係という場面を考慮した場合、ぼくは人間一般に同等であると想定してよいものであり、対自然の場面で個と類は合致するから、客観的な認識に到達することは簡単とはいえないにしても、さほど困難ではない。ぼくに見える鉱物、植物、あるいは宇宙の仕組みなどは、誰が見ても普遍的な物質性をもつであろうからだ。これに対して、風景が社会的世界に属する場合には、客観的な認識は対自然認識ほどには簡単に手に入らない。なぜなら、人々は特殊な年齢、利害、立場に阻まれて、それぞれ異なるパースペクティブを無意識のうちに生きているからである。残念ながら、ぼくに代わってぼくの生を誰かに生きてもらうことが不可能である以上、ほかの誰によっても代えがたいほかならぬぼくの側から見えるものだけしか僕は見るることができない。それこそが、ぼくが生きているという事実なのである。つまり、「I」の創発性そのものにかげがえのない当事者性が含まれてしまっているわけである。

冒頭の地下街の場面をもう一度想起してみよう。行列のなかのひとりひとは、ミードが言う通り、スポットを浴びない主我の側から靴音を聞いている。早朝に起き出して、身づくろいを終え、まじめに歩くのはいったいなぜだろう。それは平均化すれば、自分はよく働くよい労働力であるという会社における評価、そこに根拠を置く自負を失いたくないからではあるまいか。つまり、ここでの「Me」は、社内での自分に対する査定である。これはミードの言う客我にほかならない。沈黙したままの「I」たちは、本質上いわば査定される「客我」に縛られて歩いているのだ。

ところで、地下通路の「I」たちは決して「We」ではない。一人称の複数は、文法上は「We」であるが、「I」たちの関係は相互にばらばらである。徹頭徹尾冷めたものだ。行列は物質性を帯びている。人格と人格の関係が物化（モノ化）された操り人形相互の関係として現れる。それゆえここには「I」が自己内対話を媒介にして他者に自己を開いていく余地はなく、人間らしいコミュニケーション的な関係は欠如している。彼ら／彼女らは凍ったように一切互い黙して関係しあわない。

行列のコミュニケーションの不可能性がどこから来るのか。それは、互いが「他人行儀」であることがどこから来るものであるかを問うに等しい。行列の物質性は、究極的には諸資本に対する労働力の従属性から来るのである。資本は、様々な出自、学歴、労働力等級、家庭の事情、ロ

ーン、子どもの数などを抱えた実に多様な労働者をこれらの序列がよそよそしいことを所与として一手にまとめて管理している。そして各資本もまた通路では格付けされてはならない様々な個別的な資本なのである。お互いに統計上は格付けされているとはいえ、公共の場で格付けされるのは嫌だろう。

幾重にも重なりあう諸資本と多数の労働者の多様性がひろがる大衆社会のなかの孤独によって増幅されたところの、労働力の諸資本に対する無力が、関係として他律化しているからこそ、「I」は「We」をつくれないのだ。

2. 「I」の創発性とピュリダンのロバ

ミードの自我論は二つのことを言っている。一つは「I」が創発性だということである。『I』のこの性格（創発性）ゆえに、ぼくたちは自分が何者であるかをけっして十分に知ることができない。「自分の行動に自分でおどろくことがあるのもそのためである。」「I」は、そこから次々に新しい「Me」が生まれる源泉なのである。ところが、ミードは、逆のことも言っている。「Me」にたいする反応が「I」だというのだ。「I」は「Me」を評定する他者の態度に対する個人の反応であるとミードは繰り返し指摘する。

時間的経過の中で考えるとこれは理解しづらい。なぜなら、一方でミードは「I」が純粋な創発性であると言っているのに、他方では「I」が「Me」にたいする反応だとも言うからだ。反応であるためには「Me」が先行し「I」は後続するしかないのではないのか。「Me」に後続する「I」が創発性をもつというのはひとつの論理的混乱のようにみえる。

だが、おそらくそうではない。ぼくは考える。純粋な創発性というものをぼくは行為したことがあるだろうか。たとえば、通勤するとき、駅の改札を通り、階段を駆けあがり、電車に乗ったとしよう。これらの行為は誰にも命じられていない、ぼくの自由な選択による行為である。けれども、よく考えるとこのような行為は、社会からこのように行為しなさいと教えられた「Me」にたいする「I」の反応である。たとえば缶コーヒーを自動販売機から取り出したり、空き缶をゴミ箱に放り込んだり、通路の右側を歩いたり、人に会うと挨拶をしたりする。だが、これらの行為はことごとく「Me」にたいする「I」の反応である。このように考えてみると、一日に実におびただしい種類の行為をぼくはするが、ミードの言う「一般化された他者」（社会のなかではこうやるものだよというチーム観）が自分のなかに刷り込まれ、浸透し、自分のなかに「Me」を構成したためにやっていることにすぎない。ぼくは缶コーヒーのプルトップをその社会の教えにしたがって引くのである。

ひょっとすると誰にも教わらずにぼくが純粋に行った創発性とは、生まれたときに発した「オギャー」だけかもしれない。しかし、この「オギャー」さえも看護師さんが赤子の尻をたたいたことへの創発的反応であった。赤子とは生まれたとき鳴くべきだという「Me」にぼく「I」は人生で初めて反応したのだ。これは「Me」に後続する「I」の創発性である。

このように人間の行為を「I」と「Me」で考えた場合、「自我」はいわば永久に社会が与えた「Me」に反応する。創発性とは反応の創発性なのである。「Me」にたいする反応が創発性なのだ。ミードは言う。「「I」は「Me」が経験のなかに現れるのと同じ意味で経験のなかに現れるのではない」。これは、短く生きても長く生きても、永遠に変わらない本質的な特徴だ。他者から送り込まれた「Me」に具体的にどう反応するかは、その都度アドホックな自由度をもっており、どれほど慎重に考えたうえで行動するとしても、行為する瞬間の新奇さは消えるものではない。ブディングの味は食べてみないとわからない。いかに慎重に食べてみようと、様々な考慮をさしはさんでも、それが因果関係のすべてを知った完全な考慮であることはできない。なぜなら、社会のなかでの変数は無限にあるからだ。これらはどこまで考えても考えつくせるものではない。

たとえばうどんを一杯食べるのにも、一味をふりかけるか七味にするか、ねぎの量をどうするか、生姜を加えるかどうか、出汁を先に飲むか麺からにするか、いろいろ考える余地はある。しかし考えすぎるのは問題だ。うどんが冷めるからあまり考えすぎない方がよいからだ。要するにぼくは「ビュリダンのロバ」の状態にある。おなかを空かせたロバが分かれ道に立っており、双方の道先に同じ距離で同じ量の干し草が置いてあった。ロバはどちらにも進むことができず餓死してしまう。ロバの愚を犯さぬためにはいろいろな項目を視野に入れたうえで、変数を断ち切って、適当なところで「命がけの跳躍」を挑まねばならない。「見る前に飛べ」だ。

このように行為を選ぶたびに、ぼくはなにがしかの「I」の新奇さの感覚を生きるのである。生きていることが日々新鮮で面白いのはこのためであるとさえ言える。

ともあれ、ここまでの考察で暫定的に言えばこうだ。ミードがそう語っているように、「I」は「Me」に対する反応であり、そこに創発性がある。しかし「Me」への反応は多様でありうるから、この意味で「I」は創発性を永遠に生み出すのである。いわば歴史貫通的に、かつまた構造的に「I」は「Me」にたいして創発性を持ち続けるのだ。

3. 内的客我と外的客我

ミードの理論を発展させた南博は、客我を内的客我と外的客我に分けた。これはある程度までミード自身に準備されていたものであるが、客我を分析するうえで卓抜な発想であった。これによって、ミードの客我のうち「主我としての自分から見られる客我」（内的客我）が析出された。南は言う。「自分の内面を自分自身が観察し、内省する結果得られるのだから、これを『内的客我』と呼ぶ」。これにたいして「他者から見られた自分、他者が抱いていると思われるこの自分についてのイメージの面もある。この場合には、外から見られた自分という意味で、『外的客我』と呼ぶことができよう」（南博 1983『日本的自我』岩波新書、2頁）

この分析上の理論的發展によって、内的客我と外的客我の間に葛藤があることが解明された。「他人への気がねに支配される人は、なかなか自分で自分を正確に評価した内的客我を確立することはできない」。だから、内的客我は外的客我に左右されやすい。南博は、内的客我のひ弱さが日本人の自我構造の特徴であると言い、「とかく外的客我の意識が強く、他人から見られている自分を意識しすぎる自意識過剰が、自我構造の全体に影響を与えている」と論じた。

だが、ぼくは、この問題をいきなり日本的自我の問題へ具体化するのではなく、その前に、一般的な資本主義の構造の中の自我の問題を考える必要があると考える。なぜなら、日本的自我とは、日本資本主義に対応する自我のことであって、南は資本主義一般の話をつっ飛ばしていきなり日本へ話をもっていく。しかし、科学の方法から言えば、「日本的自我」を論じる前に一般的な資本主義の構造に対応する、いわば資本主義的自我の一般構造を素描する必要がある。

4. 資本主義における「I」と「Me」

ミードは社会を考えると、高い抽象度で民主主義的社会のことを考えていた。『精神・自我・社会』における経済社会の考察部分で彼は、市場の交換が相互依存の中で自我を鍛えることを見ている。たとえばこういう文章はもっと注目されてよい。

「現代のビジネスが強調しているセールスマンの態度についてはどうだろうか。その態度をわたしたちがやや軽蔑するのは、その態度にはいつでも偽善がまわりついているように思われるし、相手の態度に自分の自我を重ねて、そうして相手を引っ掛け、望みもしていないものを買わせようと言いくるめているように思われるからである。このようなセールスマンの態度を正当化できるとは思わないが、すくなくともこの態度でさえ、個人は他者の態度を取り入れる必要があり、

他者の関心を認識することが取引をうまく運ぶためには不可欠だと想定されている点は認めることができる。他者の態度を取り入れることの最終目的は、経済的なプロセスを、利潤という動機を超えた公共奉仕への関心に移してみるとわかる。鉄道や公益事業の経営者はサービスを提供する共同体の立場に自分を置かなければならない。そうすることでやがて公益事業はもうけの領域を通り抜けて、経済的事業としてうまくいくだけでなく、共同体にとってのよいコミュニケーション手段にもなりうるのではあるまいか。この可能性から出発して社会主義者はすべてのビジネス理論をつくる」（ミード『精神・自我・社会』みすず書房、第37章、313頁）

ミードはここで利潤を目的とする態度ともうひとつの、共同体を目的とする態度を対照している。ミード自身が独自の観点から社会主義に強い関心をもっていたことを考慮に入れると、資本主義の「I」と「Me」を考えておいてもよからう。実際の資本主義社会には権力がある。権力状況下で「I」と「Me」がどう変化するかが、ここでの検討課題である。

資本主義のなかでも歴史貫通的な「I」と「Me」を分析的に得ることはできる。近似値として、特別な権力関係のない同市民のあいだでの人間関係はそれに近い経験を与えてくれる。ぼくたちは権力状況下で生きているから、あらゆる場面で友人関係のようなフラットさで生きることができない。だが、そうであったとしても、それとの対照性において生産過程の権力を考えることはできる。

資本主義一般において「I」の行為の結果が「Me」と査定される時、たんに友達が評定するのは違って、権力的な査定が介入する。ここで「Me」を査定するのは資本、つまり利潤をあげる可能性である。「I」は、「Me」にたいして歴史貫通的に反応するのは違って、資本主義的な「Me」に反応しなければならない。とりわけ資本主義的な「Me」というのは外的客我の特別な一種である。「利潤目的の会社」「ノルマを達成する社員」「優秀な人材」「仕事がよくできる人」などといった、会社側から見たひとつの格付けを所与とし、社員はこれに反応する。

このとき、「I」は資本が査定にした外的客我に自己を合わせる以上、彼／彼女の「内的客我」は資本に従属している。主我「I」が対象化した内的客我が客体化された外的客我に合致するのであれば、それは資本の思うつぼである。このとき、資本は最大限に主我「I」を利潤目的で操作することができるだろう。

むろん、「I」の従属には少なくとも二種類ある。会社を与える「Me」に従順に反応する場合と資本の勢いにいやいやながら押し負けて、しかし主我をもちながら表面的には従属する場合だ。南が言及した主我の弱さは、前者の場合である。これは別段日本の自我の独占物ではなく、資本主義一般のなかで説明可能となる。

ぼくが言いたいのは、「Me」が所与の権力場面で、外的客我に押し負け、内的客我はきわめて不安定か、またはほとんど消えてしまうということである。資本は「I」の創発性を奪うことはできないが、外的客我「Me」を管理下におくことによって「I」の反応に影響を与えることができる。資本は労働力を査定し、「Me」を本人の意思とは独立に決めることができる。資本のもとでは過去（蓄積された労働）が現在（生きた労働）を支配するのだから、外的客我は、内的客我を破壊して「I」を規定する。

（以下、次号）

（たけうち ますみ）

探究ノート（Ⅲ－1）新帝国主義論

—はじめのはじめ—

中村共一

ひさしぶりに「探究ノートⅢ」として筆を執ります。

これまでの「探究ノートⅡ」は、あらためて「社会主義とは何か」といったテーマに取り組み、その成果として「市民の科学」第12号に投稿した論文「アソシエーションニズム運動 —国家を超える社会主義—」を得てきました。その上に立って、さらに「アソシエーションニズム」の探究を継続させるつもりでいました。

しかし、今年2月、コロナ感染でダウンしているうちに、東欧のウクライナで「ロシアの軍事侵攻」が起こり、世間は「ウクライナ戦争」一色に染まってしまいました。しかも、悪いことに、あの侵略戦争の結果としてえた教訓——憲法第9条の「戦争の放棄」——がいとも簡単に切り捨てられ、「軍事力強化」の政治的な動きが急速にすすんでいます。ロシアの「ウクライナ侵攻」を政治的に利用したプロパガンダがメディアを覆い、メディアは自由な情報提供を「自主統制」しているかのようです。また軍事的・政治的・経済的な「専門人」が横行し、倫理的・科学的な理性が抑圧されています。

ロシアの軍事的侵攻は、当然ながら非難されるべきなのですが、二度の世界大戦の悲惨さを体験してきた地点において、求めるべきものは、戦争の勝敗ではなく、戦争そのものの廃棄です。「地獄のような戦場」をつくりださないようにすることです。にもかかわらず、「ウクライナ支援」も、平和的な方法ではなく、暴力的な「経済制裁」・「軍事支援」の一辺倒です。暴力には暴力で対抗する「力の論理」が、ロシアを非難する側にも、あいもかわらず貫いているのです。ですので、今後においても、時と場所を変えて「ウクライナ戦争」が繰り返されていく恐怖が残されます。

だが、なぜ、そうならざるをえないのか？ これこそ、平和への「障害物」を取り除いていくための問いではないか、と思うのです。こうした問題意識から、市民科学通信第23・24号に「ウクライナ戦争とは何か——善悪論のまえに——（上）（下）」を書きました。そこでは、「ウクライナ戦争」の構図を、ロシアとウクライナの関係に限定して考えるべきではなく、むしろアメリカとロシアの関係を根底において理解していくべきだという点を明らかにしています。この戦争の背景には、アメリカがいると考えたからです。この点では、ロシアによるウクライナ侵攻が起こったあと、登場してきた「ウクライナ支援」の構図においても、その主張の正当性が裏付けられました。最も多額な「ウクライナ支援」を積極的に行った国こそ、アメリカだったからです。アメリカはウクライナに対し、2月24日の侵攻開始以降、計約61億ドルの軍事支援を行いました（毎日新聞6月24日）。またドイツの調査研究機関「キール世界経済研究所」によれば、ウクライナに対する西側諸国の支援（額）においてアメリカは半分以上を占めているのです（読売新聞オンライン、6月20日）。

（下）の論稿では、さらにロシアとアメリカの関係を、現代資本主義の世界構造との関連にお

いて捉えようとしたものでした。そのなかで「ウクライナ戦争」を、戦後世界のアメリカの経済的・政治的ヘゲモニー（パックス・アメリカーナ）に視点をおき、そのヘゲモニーの衰退において位置づけることを明らかにしています。「ウクライナ戦争」は、そもそもその衰退において採用されたアメリカの帝国主義的な世界戦略であったのではないか。

ただ、そうは主張してきたものの、今日のアメリカ帝国主義（「新帝国主義」）には、レーニンの『帝国主義論』の時代とは異なった新たな形態（とくに直接投資・多国籍企業）があり、たんに「帝国主義」による権力的な経済的収奪を説明するだけでは許されない問題状況（ネーションからの解放）があります。そう考えるにつけ、あらためて「新帝国主義」を捉えていく課題の重要性が痛感させられます。そこで、「探究ノートⅢ」を起こし、この点を追究していくことにしたのです。とはいえ、「専門研究」をするつもりはないというものの、それでもこの追究には多くの準備が必要となります。ですので、この「探究」もノートを重ねながら進めるほかありません。少し言い訳じみてきましたが、とりあえずまた「牛歩の探究」に出発です。

いま、あらためて帝国主義に関する資料をかき集めています。そのなかで、最初に目に留まったものが、デヴィッド・ハーヴェイの『ニュー・インペリアルイズム』（原書、2003年）です。一読したら、とても刺激的で、あらためて十分な吟味の必要を感じさせてくれました。当初は、世界システム論の流れのなかで、まずはハーヴェイの「新帝国主義」論を位置づけ評価してみようと考えました。しかし、論点の重さ・深さもあり、本号の市民科学通信において、本格的な作業はできそうにありません。そこで、今回は、その作業の前段として、いくつかの論点をメモするにとどめざるをえません。

「帝国主義」というと、まず思い起こされるのがレーニンの『帝国主義論』（原著、1917年）ⁱです。これは「資本主義の最高の段階としての帝国主義」として「帝国主義」を捉えたもので、「資本主義の発展段階論」ともいべきものです。と同時に、金融資本の支配（金融寡頭制と資本輸出）が「帝国主義戦争」を必然化し、「資本主義の寄生性・腐朽性」に満ちた「資本主義の最後の段階」（「死滅しつつある資本主義」）と捉えたものです。したがってまた、ここから「社会主義革命」の展望が語られることにもなりました。こうした理論が、社会主義の理論・実践や民族解放運動に大きな影響を与えてきたことはよく知られています。しかし、二度の世界大戦を生みだしながらも、アメリカ・ヘゲモニーによって資本主義はあらたな発展を遂げ、また「ソビエト社会主義」が崩壊したこともあり、この理論の有効性は失われてしまいました。

変わって登場してきているのが、国家の独自性に注目し、「帝国主義」を「国家の政策」に位置づけて捉えようとするものです。ボブソンの『帝国主義論』（原著、1902年）ⁱⁱが再評価され、アーレントの『全体主義の起源2 —帝国主義—』（原著、1951年）ⁱⁱⁱに関心が注がれてきました。ハーヴェイの『ニュー・インペリアルイズム』も、この新たな帝国主義研究の流れのなかで提起されています。これらの流れは、あきらかに現在の世界構造の変化——アメリカのヘゲモニーの衰退——としてある「帝国主義的な国際関係」を掴もうとするものです。したがって、帝国主義論のあらたな研究以前に、すでに帝国主義の現実そのものの変容があります。「新帝国主義論」とは、旧帝国主義論のたんなる繰り返しではなく、そうしたあらたな現実をうけた理論としての性格があるのです。

こうした「新帝国主義論」について探究をすすめようとしたとき、深めなければならない理論問題が幾つか浮かび上がってきました。もちろん、ここで指摘する点だけが「新帝国主義論」の理論問題を構成していくわけではありません。他にもたくさんあるように思います。だから、ここで指摘していく点は、僕がさしあたり掴んだ論点提示にすぎません。しかもアト・ランダムに並んでいます。

まず第一に、「過剰資本」の問題です。

ハーヴェイの『ニュー・インペリアルイズム』——ブッシュのイラク戦争批判を出発点として書かれたものですが——の理論には、「1970年代以降、資本主義全体には過剰蓄積という問題が恒常的につきまとっている」^vことが前提として置かれています。これによって「70年代以降の国際資本主義の不安定な状況を、過剰蓄積問題に中期的にも対処できないという、連続した空間的・時間的膠着状態として解釈する道が開ける」^vからだとされています。まさにその通りだと思いません。「新自由主義」はこの時期に誕生しています。ただ、「新帝国主義」（新自由主義）の帰結が、この問題をいかに解決しているのか、いないのか、必ずしも明確ではなく、理論的な前提が活かしきれていないように思えます。「過剰資本」の捉え方に問題があるのかもしれませんが、吟味すべき課題でしょう。

第二に、「新自由主義国家」の問題です。

この点では、世界システム論におけるヘゲモニー論が参考になります。ヘゲモニーをもつ覇権国は生産⇒商業⇒金融というサイクルのうちに転換を遂げていくというものです。1970年代の過剰生産による経済破綻は、さらに商業・金融のヘゲモニー構築に向かうこととなりますが、実際にも、アメリカの歴史的過程は、そのようにすすんできたように思います。そこで登場してきた国家の政策が「新自由主義」と呼ばれるものでした。しかし、それは過剰生産を解決できないまま、過剰消費や過剰金融へとヘゲモニーをシフトさせたにすぎません。結果、2008年の世界金融恐慌を見たわけですが、同時に過剰金融は、周辺国の産業競争力を高め、世界経済の新たな不均等発展をもたらしました。そしてまた、あらたな国民国家間の対立・緊張を高めるものとなっています。少し先走ったようですが、こうした新自由主義的な国家政策を帝国主義の本質において捉えていくのが、「新帝国主義論」ではないかと思うのです。

ただ、近代的な帝国主義の問題にあっては、国民国家と帝国主義との関係に対する根本問題があります。ここでは立ち入った検討はできませんので、柄谷行人さんの指摘（国民国家の拡張としての帝国主義）をあげておくにとどめます。アーレントのいうような「政治的統治の原理」の観点とは異なり、交換様式の観点から捉え、次のような理解を示されています。

「世界帝国の場合、征服は服従・貢納と安堵という交換に帰結する。つまり、世界帝国は交換様式B（「略取と再配分」…中村）にもとづく社会構成体である。広域国家である帝国は、征服された部族や国家の内部に干渉しない。ゆえに、同質化を強要することはない。…（略）…

一方、国民国家の拡大としての帝国主義は、各地に国民国家を続出させる結果に終わる。それは、交換様式でいえば、帝国が交換様式Bにもとづく支配であるのに対して、帝国主義が交換様式C（「商品交換」…中村）にもとづく支配であるからだ。前者と違って、後者は旧来の社会構成体を根底から変容させてしまう。すなわち、資本主義的市場経済が部族的・農業的共同体を解体する。それが「想像の共同体」としてのネーションの基盤をもたらす。したがって、帝国の支配からは部族的反乱が生じるだけなのに、「帝国主義」的支配からは、ナショナリズムが生じる。こうして、帝国主義、つまり、国民国家による他の民族の支配は、意図せずして、国民国家を創り出してしまうのである。」^{vi}

このように帝国主義は国民国家の本性としてあり、また「自由主義」は国民国家の拡大におけるイデオロギーともなるわけです。とすると、「新自由主義」とは、たんなる「自由主義」とどこが違うのかが、問題となってきます。これも、重要な課題となります。

第三に、「グローバリゼーション」をいかに捉えるかといった問題です。

単純に「地球規模化」がすすむといったことでは、歴史的意味が掴めません。むしろ「金融ヘゲモニーの国際的展開」と捉えたほうが、歴史の真実に近くなります。それは、アメリカを中心

とした世界的な投資展開としてあり、対外投資でみれば、間接投資ばかりでなく直接投資の増大も、この投資を特徴づけています。アメリカ企業は、サプライチェーンを介して世界で事業展開しており、アメリカ自体がいわば「グローバル資本主義」に変貌し、その利益を維持・拡大すべく国家の「帝国主義的な政策」が「グローバル・サプライチェーン」の構築としてその役割を果たしているのです。外交は、もはや「国務」となって、世界はアメリカの利益にそって守られねばならないのです。

この点で、注目しておきたいのは、レオ・パニッチ&サム・ギンディンの『グローバル資本主義の形成と現在』（2012年）です。副題には、「いかにアメリカは世界的覇権を構築してきたか」と記されています。まさにアメリカの帝国主義的な世界構造を明らかにしようとするものです。その問題意識を知ってもらうために、次の一文を紹介しておきます。

「アメリカという国家は、グローバルな資本主義を全世界にわたって創造することやその運営を調整することだけでなく、こうした目的のために他の諸国家を再構築するに当たっても、例外的な役割を果たした。アメリカ合衆国の名称に『帝国』というある種の一新を施された流行言葉が用いられる場合があるが、アメリカという国家の帝國的行動はその経済的側面における凋落と併せて用いられ、競合する諸国家からの挑戦を躲すという視点から説明される場合が一般的である。しかし現実には、アメリカ資本主義の途方もない力こそグローバル化を可能にした当のものであり、アメリカと呼ばれる国家を他の国家とは異なる存在にし続けているのもまた、世界規模の地平で資本主義を管理し監督するに当たって発揮されるその重要な役割にほかならないのである。」^{vii}

この文章からも分かりますように、中心は、アメリカの帝国主義的な権力の強さにあります。その意味で、逆に、帝国主義の支配関係（ネーションの解体）の側面の分析が希薄になっているようにも思えますが、帝国主義の支配形態を捉えていくのに欠かせない分析が示されています。

第四に、ハーヴェイの『ニュー・インペリアルイズム』にもどり、新帝国主義の「支配」を「略奪による蓄積」と捉えた点を取り上げたいと思います。

ハーヴェイの「略奪による蓄積」論そのものとしては、あらためて本格的に取り上げようと考えています。その視点は、帝国主義の本質を明らかにしていく視点であり、また新帝国主義の形態を明らかにしているように思えるからです。簡単には、説明できません。ここでは、それに代えて、ハーヴェイの新帝国主義論を高く評価する小沢弘明さんの指摘を紹介していくことにします。

小沢さんは、「韓国併合」と関わって「新帝国主義」を語られているのですが、その主張は、それが帝国主義認識に新たな視点を与えている点に向けられています。

「新帝国主義とは、『略奪による蓄積』（ハーヴェイ）という新自由主義の資本蓄積と不均等発展を支える、軍事・政治・文化の諸領域における空間支配の表現である。つまり、新帝国主義は新自由主義の不可欠の構成要素、というよりもむしろ新自由主義の本質そのものなのである。」^{viii}

『ニュー・インペリアルイズム』をこのように受け止めた小沢さんは、「自由主義は帝国主義と対抗的なものではなく、新帝国主義は自由主義の言説に支えられ、自由主義の名のもとに展開される帝国主義」^{ix}であると捉えられています。この点、さきにみた柄谷行人さんの理解にあったように、むしろ帝国主義にみる共通の特徴ではないかと思えますが、小沢さんの指摘において重要な点は、新帝国主義を「自由主義の名のもとに展開される帝国主義」と見なした上で提起されてくる「帝国主義認識」の刷新にかかわるものです。

その一つが、「帝国主義と新帝国主義との連続性」からみた「『冷戦後』や冷戦における自由主義の勝利といった現状認識」は誤っており、第三世界の側からみれば逆の評価（自由主義の敗

北)も成りたちうるというものです。「1991年をいかなる意味で世界史の転換点ととらえるのか、また、「冷戦後」という時代把握が何を見えなくさせているのか、が問われることになる」^xと指摘されています。ドキッとした点です。確かに「冷戦」(あるいは「冷戦後」)とは何かを改めて考えさせる視点が「新帝国主義論」には含まれているように思えます。冷戦後、NATOは解体されてもよいはずなのに解体されなかった。何故なのか。

二つめが、帝国主義と自由主義とを「相補的なもの」ととらえる点からの指摘です。

「暴力と抑圧を否定し、文明を称揚して近代化を推進することは、帝国主義と矛盾するものではない。むしろ、『帝国主義的自由主義 imperial liberalism』あるいは『自由主義的帝国主義 liberal imperialism』という側面こそが、帝国主義の本質なのではなかろうか。」^{xi}「帝国主義の自由主義的側面を指摘したり、強調したりすることは、じつは帝国主義の本質を指摘しているのであって、けっして帝国主義の免責につながるものではない。」^{xii}

昨今、耳にタコができるほどに聞くフレーズが「自由で開かれた」という修飾語だ。まさにこの点——自由は「市場の自由」を意味するにすぎない——にこそ、帝国主義をつかみとる「認識」が求められます。

さらに、「韓国併合」について、小沢さんは、「二国間関係の問題でも、東アジアに限定される問題でもない」、そうではなく、「帝国主義世界体制に支えられた連関」のなかにあり、そこに「世界を構造化しようとする権力関係が作用している」^{xiii}点をみなくてはならないと、語っていきます。「ウクライナ戦争」をこうした視点から捉えようとしてきた僕としては、まったく同感です。

今回は、以上で終わりです。次回、もう少し論点を掘り下げてみたいと思います。

i V.I.レーニン『帝国主義論』副島種典、国民文庫、1961年。

ii J.A.ボブソン『帝国主義論』(上・下)矢内原忠雄訳、岩波文庫、1951年、1952年。

iii H.アーレント『全体主義の起源 2 - 帝国主義』大島通義・大島 かおり訳、みすず書房、2016年。

iv D.ハーヴェイ『ニュー・インペリアルイズム』本橋哲也訳、青木書店、2005年、110頁。

v D.ハーヴェイ、同上書、111頁。

vi 柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、2015年、361-362頁。

vii L.パニッチ、S.ギンディン『グローバル資本主義の形成と現在』長原豊監訳、作品社、2018年、14頁。

viii 小沢弘明「新自由主義・新帝国主義・『韓国併合』」(『「韓国併合」100年を問う』趙景達、宮嶋博史他編、岩波書店、2011年所収)321頁。

ix 同上、322頁。

x 同上、322頁。

xi 同上、322頁。

xii 同上、323頁。

xiii 同上、324頁。

